



Data

監督：チャド・スタエルスキ

出演：キアヌ・リーブス/リッカルド・スカマルチョ/ルビー・ローズ/ジョン・レグイザモ/コモン/ピーター・ストーマ/イアン・マクシェーン/ローレンス・フィッシュバーン/フランコ・ネロ

■■■ショートコメント■■■

◆ベン・アフレックが『ザ・コンサルタント』（16年）で、「表はしががない会計士、裏は殺し屋・・・」という突出したキャラの主人公役で、盟友マット・デイモンが『ボーン』シリーズで見せるアクションに挑戦（『シネマルーム39』285頁参照）！

それなら、キアヌ・リーブスは、ガンアクションとカンフーアクションを結合させた「ガン・フー」をひっさげた『ジョン・ウィック』（14年）で、凄腕の殺し屋ジョン・ウィックに挑戦（『シネマルーム37』77頁参照）！

『ザ・コンサルタント』の続編を作るか否かは不明だが、『ジョン・ウィック』は好評で、『マトリックス』シリーズに続くキアヌ・リーブスのハマリ役になりそうなため、直ちにパート2の企画が決定。

◆1960年代に『007』シリーズが始まった時は、ジェームス・ボンドの女好きで、ベッドテクニック抜群という「能力」と共に、スパイとしての知能、殺傷能力、カーアクション等の「能力」の高さが目立っていた。以降、様々なキャラのスパイや殺し屋が登場してきたが、今般シリーズ化された殺し屋ジョン・ウィック最大のキャラは、前述したガンフー。これはなるほど、と十分納得できるものだった。

本作ではその「ガン・フー」と並んで、冒頭に車を使った「カー・フー」も登場する。これはナイフを使った「ナン・フー」と並ぶジョン・ウィックの得意技らしいが、さて、本作にみるそれらの技のお手並みは・・・？

◆ちなみに、本作のチラシには、「本編122分で141殺一。無敵の男ジョン・ウィック」として、その「語り継がれる最強の殺し屋の伝説の裏側を闇の住人たちが証言！」している。それを転載すれば、次の通りだ。

本編122分で141殺——。

無敵の男JW

語り継がれる最強の殺し屋の伝説の裏側を闇の住人たちが証言！

伝説1 武器
ウェポン・ソムリエさんの証言

ウィック様のお好みは独製、しかし私は取ってオーストリア製のグロック34と26を、他のデカ物やナイフと共にご提供させて頂きました。

伝説3 交友関係
裏社会の情報王 キングさんの証言

前のジョンの相棒は、亡き妻の忘れ形見のビーグル犬。そいつが死んじまって2代目愛犬はピットブル。しかし名前はまだ無いらしい。

伝説2 ファッション
裏仕立て屋さんの証言

彼のスーツは弾丸を透さない特殊な繊維を用いたフルオーダーの殺し屋仕様。仮に発射しても、激痛と、骨折程度で済ませられるのが特徴です。

伝説4 殺テク
殺し屋組織代表 ウィンストンの証言

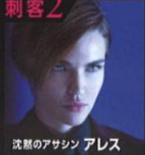
打撃・投げ・関節技等と銃撃を混ぜたガンフュー、ナイフを用いたナイフフュー、車を使ったカーフュー等。彼の殺テクは多様だ。鉛筆で三人を暗殺した事もあるんだ。

伝説5 愛車
闇の車屋 オーレリオさんの証言

静寂に生きる殺し屋だが、ヤツには関係ない。愛車は音響よくフォード・マスタングBOS5429。伝説の名車すぎて、よくテンピラに溢れちゃってるよ。

◆日本の国技である大相撲でも、興行の面白さを競う競技であるプロレスでも、主役と共にその敵役が重要。それは「殺し屋映画」でも同じで、主役のキャラと敵役のキャラの衝突が殺し屋映画の面白さを生むわけだ。しかして、「見渡す限り全部敵！」の本作に登場する刺客1～刺客6は次の通りだ。

—— 見渡す限り全部敵！ 最強の殺し屋たちが、伝説の男に襲いかかる！ ——

刺客1  イリアン・マフィア サンティエノ	刺客2  沈黙のアサシン アレス	刺客3  エリート殺し屋 カシアン	刺客4  敵か味方か？ 情報王 キング	刺客5  捕殺スモウ	刺客6  殺しの旋律
---	--	---	---	--	---

殺しのテクニックでジョン・ウィックとほぼ対等の男は、刺客3の「エリート殺し屋」カシアン（コモン）だが、面白いのは、ろうあ者であるため「沈黙のアサシン」と言われている女刺客アレス（ルビー・ローズ）。ジョン・ウィックが手話もできるというのは驚きだが、さて、このアレスの殺しのテクニックのほどは……？

クエンティン・タランティーノ監督の『キル・ビル～KILL BILL～Vol.1.1』（03年）では、栗山千明が扮した17歳の女子高生ゴーゴータ張が面白いキャラだったが、さてこの女は……？

◆最近映画の公開に合わせて、その関連作品をテレビで放映するケースが増えている。過日の『パイレーツ・オブ・カリビアン』シリーズもそうだった。しかして、本作の公開に合わせて、去る7月19日には『ジョン・ウィック』がテレビ放映された。私は最近の映画を2度3度観ることはほとんどないが、この分だけはしっかり夕食を食べながら鑑賞

したので、本作の評論はバッチリだ。

2017 (平成29) 年7月21日記